

【大蔵谷宿と徳川道】

【大蔵谷宿】

大蔵谷は西国街道沿いにあり、西の大久保宿、東の兵庫宿との間に位置していた。大名の参勤交代などの折には本陣、脇本陣も使用されており、宿場町として繁栄した。

【神戸事件の発生】

慶応4年(1868)、神戸市中央区三宮神社(大丸神戸店山側)付近で神戸事件が発生した。1月初め、岡山備前藩は朝廷から西宮の警備を命じられ、1月10日に備前藩家老日置帯刀一行186人が大蔵谷に宿泊(本陣へは33人)した。翌朝出立すると昼食の休憩には兵庫津浜本陣網屋新九郎邸(現在の兵庫県立兵庫津ミュージアムの場所)が利用され、午後には西国街道にもどり東へと進み、三宮神社付近に到達したところでフランス人水兵が隊列を横切ったことがきっかけで紛争がおこり、備前隊による発砲事件が発生した。

街道の海側一帯は神戸外国人居留地造成途中の空地となっていたが、隊列を見物していたイギリス公使のハリー・パークスをはじめとした諸外国の領事館職員や仮領事館として使用されていた兵庫運上所(後の神戸税関)に掲げられた各国国旗に向けて銃撃がなされたことから、備前隊と米・英・仏の守備隊との銃撃戦になった。

その後外国人は神戸一帯を占領し、港に停泊していた各藩の船を拿捕するなど、大きな事件となった。

【大蔵谷からのバイパス「徳川道」】

幕府は文久2年(1862)に発生した薩摩藩兵による英国人殺傷事件(生麦事件)が薩英戦争まで至った教訓から、兵庫開港を目途に外国人雑居地である神戸を迂回させるため山間部の道「往還付替道(「徳川道」)」を整備していた。しかし、備前藩兵は従前の西国街道を通行したため事件が起こった。この事件発生により、後発の池田伊勢隊は大蔵谷から北に徳川道を進んだ。山田村で一夜の宿を頼んだという記録があり、御影まで2日かかっていることから、まだ宿場すら整備されていなかったことがわかる。



徳川道がつくられた朝霧川西岸

【幕末の明石藩の台場】

【外国船の来航と洋式砲台の整備】

欧米列強の来航が相次いだ幕末、幕府は海防強化のため、江戸湾品川沖に台場を築造した。台場とは沿岸防備のための砲台のことである。安政元年(1854)、日米和親条約が締結され、この年に露国のプチャーチンがディアナ号で大坂湾に来航して開国を要求した。翌年、幕府は大坂湾防衛のため、諸藩に台場築造などの命令を下した。明石藩はこの命令を受けて新たな台場を築造した。このうちの一つは稲爪神社南の現在の大蔵海岸に位置した台場である。さらに、文久3年(1863)からは、勝海舟の現地指導を受けて、新たな台場を築いた。現在の神戸市垂水区東舞子町の国指定史跡「明石藩舞子台場跡」はその一つである。これらの明石海峡沿岸の台場群は実戦で使用されることなく明治維新を迎えた。



幕末に台場がつくられた大蔵海岸

あかし歴史のまち 「文化財ウォーク」

大蔵谷の西国街道を 巡る



現在の西国街道

明石の歴史ある寺社や風情豊かな景観の残る
昔の街道周辺を歩いてみましょう。



休天神社



稲爪神社



大蔵院



穂蓼八幡神社

モデルコース

●明石駅

徒歩16分

●神明国道子午線標識

徒歩3分

●休天神社

徒歩5分

●大蔵院

徒歩3分

●稲爪神社

徒歩3分

●大蔵谷脇本陣跡

徒歩7分

●服部邸・卯月邸・大塩邸

徒歩1分

●穂蓼八幡神社

「大蔵谷の西国街道を巡る」文化財地図



明石における交通の歴史

古代より明石は、中国大陸や朝鮮半島に近い北部九州と、政治・文化の中心地であった畿内地域との間に位置する海陸の交通の要衝だった。奈良時代には役人や兵の移動、都と地方との連絡や税の輸送などのため、全国に東海道・東山道・北陸道・南海道・山陽道・山陰道・西海道という幹線道路が整備された。明石を通過する山陽道は都と大陸文化の玄関口である大宰府を結ぶための道で近世の山陽道(西国街道)と区別するため「古代山陽道」と呼ばれている。道幅は10m以上あり、可能な限り直線で通され、沿道には約30里(16km)間隔で瓦葺の宿泊・休憩施設である駅家が設けられていたことが発掘調査などの成果により明らかになっている。

江戸時代になると徳川幕府は全国の街道を整備し、沿道に松並木と一里毎の目印とするための塚を造り、榎などの大きな木を植えた。街道沿いの各藩は宿場や本陣、渡しなどを設け往来の便宜を図った。

明石藩では、西国街道の大久保、清水、大蔵谷に宿場が設けられた。それぞれに本陣・脇本陣・旅籠屋などがあり、参勤交代の大名やその家臣団、寺社への参詣に向かう庶民たちで賑わった。現在も大久保や大蔵谷周辺に残る伝統的な建造物は、当時の街道の景観を今に伝えている。

1 神明国道子午線標識(明石市指定文化財)

昭和3年(1928)の天文測量で定められた子午線を示す標識(コンクリート製)で、昭和8年(1933)に国道2号(旧神明国道)沿いに建てられた。

昭和26年(1951)に実施された再観測に基づく他の標識より約10m西側に建っている。北側には明石子午線郵便局がある。



2 休天神社 ※表紙に写真

菅原道真を尊敬していた明石藩主松平信之が延宝7年(1679)に建立した。本殿前には道真が延喜元年(901)に大宰府に向う途中、明石の駅家で休息したという「踞石」がある。太寺にはこの話にちなんで昭和7年(1932)に建てられた「菅公旅次遺跡」の碑もある。

明治17年(1884)4月には北海道の名付け親の松浦武一郎が休天神社に立ち寄り、鏡を奉納している。明石で発動機製造を始めた「木下吉左衛門」と明石型と呼ばれる鮮魚運搬船「新生丸」を建造した「小杉造船所」の文字が刻まれている玉垣もある。



踞石

3 大蔵院 ※表紙に写真

臨済宗南禅寺派の寺院で本尊は聖観世音菩薩である。禅宗の高僧・中蔵円月が、応安3年(1370・南朝では建徳元年)に創建したと伝わる。

嘉吉元年(1441)、守護大名の赤松満祐が室町幕府6代將軍足利義教を殺害する、いわゆる「嘉吉の乱」を起こした。満祐は領地に逃げ帰り、弟の祐尚は満祐を追討する幕府軍をここ大蔵谷に陣を構えて迎え撃ち、その後、居城を三木に移すにあたり、陣屋跡を寺院にした。墓地には祐尚夫妻の墓がある。



赤松祐尚夫妻の墓

4 稲爪神社 ※表紙に写真

三島大明神を祀る神社である。毎年10月の秋祭りには兵庫県指定重要無形民俗文化財の「大蔵谷の獅子舞」、明石市指定無形民俗文化財の「大蔵谷の牛乗り」「大蔵谷の囃口流し」が披露される。神社に伝来する「稲爪神社太鼓」は櫓製で胴体に四つの環が付き、内部に過去の太鼓皮張替えを示す墨書がある。江戸時代の祭り、太鼓の修理に関わる職人の活動の一端を示すものとして明石市指定有形文化財に指定されている。



稲爪神社太鼓

5 大蔵谷脇本陣跡

本陣とは大名・公家・旗本・幕府役人などの宿泊施設である。脇本陣は本陣で対応できない場合などに使用された。現在の大蔵会館の場所は脇本陣の石井邸の跡である。



6 服部邸・卯月邸・大塩邸

この3軒はいずれも虫籠窓が特徴的な木造厨子2階建の平入りの建築である。宿場町の景観を今に伝える町屋で明石市都市景観形成重要建築物に指定されている。



右から服部邸・卯月邸・大塩邸

7 穂蓼八幡神社 ※表紙に写真

稲爪神社の御旅所で、越智益躬の子どもが父の霊を祀っている。江戸時代、大名たちは、この神社の前を敬って通ったと伝わる。

市内最古と推定される布団太鼓が残されており、戦後復興期には戦災で布団太鼓が失われた地域にも貸し出されていた。



穂蓼八幡神社の先代布団太鼓